一當亥春迄毎年罷出候分、向後三年目可罷出候、
一隔年ニ罷出候分、向後四年目、
一三年目ニ罷出候分、向後五年目、
一四年五年六年目ニ罷出候分、向後七年目、
一七年目より相延候分ハ、當春迄通、但當春迄年々罷出候年より之積を以、向後御定之通可罷出候、
一江戸より貳拾里四方、只今迄之通可罷出候、且又寺院總代幷代僧神主社家等、名代を以御札等差上來候分ハ、只今迄之通可相心得候、
右之通、御料ハ御代官、私領ハ領主井地頭より可申付候、承合候儀有之候ハヾ、寺社奉行へ可被談候、以上、

十一月

右之趣可被相觸候

〔空華日工集〕永德二年正月十六日、略中余與僧録大清參下府、義滿足利府君出接、略賀而退、人事銀劒一腰、杉紙十力、略中就于管領宅賀歳、人事青磁爐瓶一襲十力、時令弟將作在焉、次過赤松宅、他之不面、十七日、大御所、次大方殿、次無等局賀歳、

〔梵舜日記〕慶長八年正月十六日癸酉、伏見家康德川へ諸家御禮、二位卿爲名代權少輔太刀折紙、予杉原十帖、扇二本令持參也、

〔駿府政事録〕慶長十八年正月二日、略中醫者衆、法印法眼、御太刀持參、六日、奥之御書院、金地院崇傳御目見、增上寺觀智國師、使僧廓山上人、其外天台、眞言、淨土、法華御禮、伊勢内宮、外宮、三社人等御禮、諸社人等御禮、